

平城遷都千三百年祭と

薬師寺を訪ねる

吉見 宏

炎暑の名残も去った十月二十日、車窓から色づき始めた露地みかんを眺めつつ蒲郡を出発した。刈谷パーキングエリアで歴史散歩の会と合流し一行百五十八名が四台のバスで奈良に向かった。車中は誘い合った仲間のにぎやかな会話で旅が始まった。役員の方の懇切な解説を聞き、期待が高まった。

バスを降りまず驚いたのが平城宮跡の広さであった。約百三十ヘクタールの敷地の中の建物や遺構を約三時間で自由見学した。

まず、朱雀門から約八百メートル北にある第一次大極



▲復原された第一次大極殿

殿に向かった。前庭には、借りた天平衣装をまとい貴族の気持ちになって楽しむ女性もいた。復原されたこの大極殿は正面約四十四メートル、側面約二十メートル、高さ約二十七メートル、屋根瓦約九万七千枚を使った平城宮最大の宮殿で、当時、天皇の即位式や外国使節との謁見など、国の最も重要な儀式のために使われていた。

第一次大極殿を出て、第二次大極殿跡、体験学習広場、遺構展示館などを巡った。遠足の子ども達が、草原に座って弁当を広げるのどかな風景も見られた。

朱雀門に向かって進むと近鉄奈良線の踏切がある。丁度電車が通った。その手前には見学者を乗せたハートフルトラムが止まった。歴史的遺構の中に現代が息づく光景に感慨を覚えた。

平城京歴史館と遣唐使船復原展示には、多くの人が集まっていた。入場には整理券が必要で入るのが難しかった。

遣唐使船は、全長約三十三メートルの木造船で、荒海を乗り越え多くの苦難を克服して文化の交流に貢献したことの大きさを改めて感じた。

記念になる土産の買いものを終えて午後二時二十分、薬師寺に向かった。

薬師寺は天武天皇の皇后の病氣快癒を祈願して藤原京に建立され、七百十八年に平城京に移された。当時は南都七大寺の一つとして、その大伽藍はわが国随一の莊美を誇っていた。度々の災害によって東塔を除く諸堂が失われたが、写経勧進によって金堂・西塔中門・回廊・大講堂が復興され白鳳伽藍の美しさが甦った。

西塔は一日三回の開扉による特別拝観で、午後三時から入ることができた。釈迦八相のうち後半の四相にあたる諸像が安置されていた。西塔を拝観してから、僧坊に行き法話を拝聴した。



▲遣唐使船の復原展示

本尊の薬師如来は体の健康心の健康を守って下さるお

薬師様だ。命あるもの、生きとし生けるものを大切にしたい、人の痛みをしつかり受ける人になりたい、と熱を込めて語られた。

次に天平二年の創建時から現存している東塔に行き、解体修理を控えているので窓越しに拝観した。金堂では、わ



▲法話を拝聴

が国の仏教美術の最高傑作ともいわれる国宝の薬師如来、日光菩薩、月光菩薩を拝観した。それから、心に留めたのは、薬師如来坐像の台座文様である。そこには上から、ギリシャ、ペルシャ、インド、中国の文様が描かれており、この台座が持つ国際性と東西文化の交流を知ることができた。奈良がシルクロードの終点と言われるゆえんである。拝観を終えて外に出ると、

金堂の横にある歌碑が目に入った。

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐々木信綱

曇り空ではあったが、爽やかな空気が澄んだ空に浮かぶ一ひらの雲を思い浮かべた。

千三百年の時空を超えて現代に生きる歴史との貴重な出会いに、満たされた気持ちを抱きながら、午後四時五十分奈良の地を後にした。

車中では、しばらくの休息の後、平城宮跡見学の疲れも癒え、予定のコースを終えた安心感も加わって、会話が弾みだした。

午後八時三十五分、日がとつぷりと暮れて市民会館へ到着。お世話になった方々に感謝しつつ家路についた。



▲薬師寺金堂